

《若松 英輔》氏

「見えない涙 ～かなしみの詩学～」

見えない涙

宮沢賢治の詩に「無声慟哭」と題する作品があります。「無声」は声が出ていないことを意味します。「慟哭」は、声を張り裂けんばかりに泣くことです。「哭く」には「犬」の文字が据えられていますが、泣く声はときに獣のようにすらなることを、この言葉は示しています。しかし、賢治は慟哭も極まれば、声を出さずに泣くことになる、というのです。奇妙に聞こえるかもしれませんが本当です。人は泣くとき、必ずしも大きな声を出すとは限りません。

同様に、悲しい人もいつも涙を流して泣いているわけでない。本当に悲しいとき、涙は涸れ、見えない姿で胸の中を流れ続ける。多くの人がこうした経験を持っているのではないのでしょうか。もし、そうだとしたら、目の前で笑っている人の心の奥にも悲しみがあるのかもしれない。むしろ、悲しみの底にあるとき、人は、それを他者に悟られまいと、微笑みを浮べることもあるのかもしれない。そんな風にも考えられます。

5つのかなしみ

「かなしみ」は、さまざまな漢字で表現できます。「悲しみ」「哀しみ」「愛しみ」「美しみ」そして「愁しみ」です。

「悲しみ」は、悲痛、悲嘆、あるいは宮沢賢治は悲傷という文字を自身の詩に用いています。これは、身が砕かれそうになる「かなしみ」です。

「哀しみ」は、「哀れ」と書いて「あわれ」と読むように、他者のかなしみを自分のそれのように感じるはたらきです。

「愛しみ」、この言葉は、悲しみとは、愛するものが失われたことを意味するということを教えてくれています。悲しみは、愛の発見でもあります。

「美しみ」、この文字は、かなしみの底には美が潜んでいることを、また、かなしみを生きる者の姿は実に美しいことを示しています。

「愁しみ」、この言葉をよく用いたのは詩人の中原中也です。この言葉で中也は、自己のかなしみを超え、歴史の、あるいは人類の「かなしみ」にふれたときの心持ちを表現しました。

5つの異なるかなしみが存在するわけではありません。少なくとも5つの「かなしみ」が折り重なるように存在していることを「かなしみ」という言葉の歴史は教えてくれています。

言葉を探して

ここにいる皆さんが、耐えがたい「かなしみ」、苦しみを経験されていると思います。人生には幾度か、歩き続けるのが難しいと感じさせる試練が訪れます。

そうしたとき、私たちの「つえ」になってくれるのは、言葉です。言葉は目に見えない。しかし人は、大きな困難にあるときもわずかな言葉を胸に抱きしめることで立ち上がることができる。もし私たちが、「つえ」である言葉を見出すことができたなら、それをうまく見出せない人に手渡すこともできます。

2012年に父が亡くなりました。今から思うと父は私にいくつもの「つえ」を手渡していてくれた。でも、彼が生きていたとき私は、それをあまり役に立たない棒のように思っていました。そればかりか、「つえ」を手渡されるのが、わずらわしいと感じたこともありました。

たとえば、父がくれた言葉の「つえ」は、「からだを大事にしろよ」というものです。実に当たり前のことですが、本当に大切なことです。

彼は私をととても大切に思ってくれていました。しかし、直接そう口にするにはできない。「からだを大事にしろよ」とは、自分は息子であるお前を心から大事に思っている、ということの別な表現にほかなりません。

人は、ひとりの人が本当に愛してくれていたら、絶望からでもはい上がってこられる。父は、世の中の人がどんなにお前を非難することがあっても、自分はいつもそばにいる、ということを書いたのかもしれません。

大切な言葉は、しばしば、じつに凡庸な姿をして現われます。ですから私たちはそれを注意深く見つめなくてはならない。「つえ」になる言葉は、格言のような姿をしているわけではないのです。

書くということ

悲しみがなくなることはありません。愛があるところには必ず悲しみがあるからです。誰かを愛することは、悲しみを育むことだともいえる。しかし、悲しみの経験は人を生の深みに導きます。

そこで私が皆さんにご提案したいのは「書く」ことです。自分の心持ちを知っている言葉で、これまで一緒に生きてきた懐かしい言葉で「書く」ことです。

「書く」とメモすることは全く違います。メモするとき人は、何を書くべきかを既に理解している。しかし、ここでいう「書く」とは、実際に文字を刻んでみて自分が何を考え、感じ、そして生きているのかを改めて認識しようとする行いです。

本当に「書く」ということが起こるとき、そこに生み出された言葉に、最も驚くのはそれを読んだ他者ではなく、自分自身です。

また言葉は、人間がこの世にもたらすことができるもののうち、最も美しいものの一つではないでしょうか。それは「つえ」でもありますが、枯れることのない花のようにも感じられます。人は、自分に必要な言葉の「つえ」、言葉の「花」を、誰かに頼ることなく、自分で見つけることができます。

さらに、言葉は贈り物になる。身近にいる人はもちろん、それは亡き者たちへのこのうえない捧げものになります。

文字は目に見えますが、言葉の本質である「意味」は目に見えません。しかし、たしかに存在する。人は言葉を書くことで、目に見えないが、疑うべくなく存在するものをはっきりと感じる経験を繰り返すことになります。そのとき私たちは、生者の「言葉」とは異なる亡き者たちからの沈黙の「コトバ」というべきものもまた、より明らかに感じるようになるのではないかと思います。

今日から書いてみてください。ぜひ、懐かしい、用い慣れた言葉で、ありのままを書いてみてください。他の人ではなく自分に、そして自分の大切な人にむけて書いてみてください。